

と将来に向かつての不安なども重なり、極度の疲労、栄養失調などが加わり、初めての厳寒に予想外の死亡者を出すことになった。特に初年兵にとっては、重労働という外圧に加えて、日本軍内部の人間関係も加重されて過酷な毎日であった。

労 役

宿舎完成後は、近くの露天掘りの炭坑に働かされた。正味八時間、多少の風邪、下痢、痔疾、神経痛、怪我などにも関係なく、零下四〇度にも採炭作業に駆り出されてノルマ達成のため職場監督の怒号に追い回され、ノルマ未達成のため、食事の量も減らされた。

抑留者の統制管理

極東ソ連の拠点ハバロフスクに近い収容所ではあったが、アクチブ活動もまだ活発化していなかった。日本新聞による広報活動等が徐々に強まっていた。

抑留中の生活と極限状態の意識

初めての越冬によって多数の死亡者を出したが、二年目の冬は炭坑の作業が三交代制になり、深夜作業もあり消耗はさらに酷くなり、帰還の望みもなくて、抑

留が長期化するに従いモラルの低下、盗み、怠業の機運が深まった。

帰 還

昭和二十二年二月にライチハで就業中、風邪に肺炎を併発し、ハバロフスク地区の病院に転送され、約三カ月で全快した。内地帰還のため五月にナホトカに移動したが、同地区の煉瓦工場の労役を課せられ、三カ月して内地送還となる。九月二十八日に舞鶴上陸、復員手続をとる。

「ダモイ」を心の支えに

茨城県 府馬 正 治

私は、昭和二十年三月、旧満州国黒河省孫吳というところの松岡第一二三師団孫吳工兵隊第三中隊第二班におりましたが、そのうち各班より勝る者をよりすぐり、一大隊にまとめて、その日のうちに神武屯の山奥に陣地構築に出発して行きました。五月には、自分た

ちも四十人ばかりで鹿島台という山の中に陣地の構築をしていました。縦坑と横坑と斜めと三カ所を、もう少しでドッキングするという朝、飛行機が飛んで来た。どこの飛行機かわからないので、すぐ伝令を出し本部に問い合わせた。ソ連だと言う。ソ連の飛行機がなぜ高いところを飛んでいるのだ!! これはおかしい……。

伝令が三時ごろ帰ってきた。「すぐに本部へ帰って来い」というので、機具類をまとめ下山した。その日は昭和二十年八月十三日の夕方でした。

夜になり、工兵隊の営庭に集合した。その後、中隊長の訓辞をもらい、その夜のうちに出発しました。夜が明けてみると、仲樂山の山の中でした。私たちは仲樂山の山の下まで来て、雨の中、歩哨に立たされました。歩哨に立って、二、三日過ぎたころでしょうか? 工兵隊の営庭にて、仲間たちと一緒に詔勅放送を聞きました。なんとも言えない物悲しい思いでした。

それからは、内地へ帰りたい思いで毎日毎日過ごしました。内地へ帰るためには、南孫呉へ通じる清流橋を直すしかありません。毎日、早く直すことだけを考

えて働きました。約一週間くらいたったころでしようか、武装解除になり、黒龍江を船にて渡り、ブラゴエシチエンスクよりソ連の地へ入った。この日より抑留者となった。

一夜を明かした次の日、少し先のところへ行つて、シラミの煮沸消毒と発疹チフスの消毒、入浴、身体検査をされました。戦友たちが約千人くらいいたでしょう。抑留者の労役時間は八時間〜九時間くらいでした。抑留者が労役ノルマを達成するためには、どの労役につくかは班長の判断にて決まりました。しかし、なかなかうまくいがなく、いろいろと工夫を要しました。

労役は体の健康、負傷などにより免除されることもありましたが、ほとんどなく、重病人のほかは自分自身で健康管理をしなければなりませんでした。飢えと寒さと重労働を共通労苦とする中で、自己体験を通じ、それぞれの労苦がどのようなものであり、それをどうやって乗り越えたか。そういう状況の中、自分を支えたものは「ダモイ」の一言であった。

抑留者の生活は、朝・夕の点呼から始まった。点呼時に、自分の荷物の中に他人の物が入っていたら営倉に入れられた。

私は足を負傷していたので、班長より炊事勤務に回された。炊事は二十四時間勤務交代でした。その後、漬物工場へ回されました。

三カ月後、漬物工場より戦友と二名にて収容所へ帰れとの連絡を受け、その日のうちに六キロの道を歩いて帰った。収容所からトラックに乗り、ナホトカではかの隊員たちと合流し、日本へ帰るための船を待った。

昭和二十三年十一月のことだった。ナホトカの港が結氷してきた。「ことしはもう船が来ないのか」、友達と口に出せない寂しさを覚えた。最後の船が来た!! 自分たちはその船に乗れた。「うれしい、これで内地へ帰れる」、はやる気持ちを押さえ、名前を呼ばれるのを待った。

やっと船上の人となり、船が動き出し、ほっとした。

昭和二十三年十一月二十三日、舞鶴へ上陸した。点呼をとり、持ち物検査を終了して宿舎に一泊した。翌

朝、舞鶴より汽車にて京都経由で品川に着いた。ホームで迎えの人を探し出さなければ、自分の家に帰ることができません。

私が家の人を探していたら、自分が兵隊前に働いていたところの主人が旗を持って迎えに来ていました。汽車にて銚子駅に着き、夕方、渡船にて波崎町へ帰ってきました。

取りあえず、波崎の前に働いていた家に落ち着きました。

人々は、負傷した足をまず見て、中には「お前、生きていたのか? 死んだと聞いていた」「お前は共産党になったのか」と言われたが、私は逆らわずにいました。十二月だというのにとっても暖かかったので、半袖のシャツで仕事をしていると、「シベリア帰りで頭がおかしくなっている」と言われたりした。

その後、私はいわし加工場で働き、自分で独立し自営業で店を始めました。